

1980年における出羽島住民の生活行動

澤端智良

- | | |
|----------------------|---------------------|
| I. はじめに | 3) 娯楽 |
| II. 牟岐町における消費者の買い物動向 | 4) 医療関係 |
| III. 出羽島住民の買い物・娯楽行動 | IV. 出羽島住民の生活に関わる諸問題 |
| 1) 調査の概要 | V. おわり |
| 2) 買い物 | |

I はじめに

本稿では約 20 年前に実施された「1980（昭和 55）年京都大学文学部社会学教室による牟岐・出羽島調査」で得られた資料をもとに、当時の島民の生活行動を復元し考察することを目的とする。

この調査が行われた 1980（昭和 55）年頃は、わが国が高度経済成長期から低成長期へ入ってしばらく経ち、国民の消費スタイルも徐々に変わりつつある時代であった。消費者の価値観の多様化、モータリゼーションの進展、新業態小売業の出現などといった言葉がありとあらゆる報告書や論文といった類いのものなかでさかんに使用される様になったのもこの頃からである。

主要大都市圏では郊外にスーパーをはじめとする大型店が相次いで立地し、食料品や日用品といったものが比較的手に入りやすくなった。主要幹線道路沿いのいわゆるロードサイドには、ファミリーレストランやディスカウントストア、専門量販店などそれまでにはあまり見られなかった業態の店舗が次々とオープンした。とくにファミリーレストランをはじめとする外食産業の成長は、日本人のライフスタイルの変化といったものを如実にあらわしていると言えるかもしれない。さらには時間消費、量から質へなどといった言葉が囁かれ始めた、そんな時代であった。また、筆者らが属する日本の地理学界においても、これら大都市の郊外をフィールドに、消費者行動に関する多くの事例研究が積み重ねられていた時期であったといえる。

その一方で山間部や離島をはじめとする地域では、人口流出によって人口減少が続くいわゆる過疎問題がその当時既に深刻な問題となっており、出羽島もその例外ではなか

った。1960（昭和 35）年には 831 人であった出羽島の人口も、徐々に減少し、京都大学が調査に入った 1980（昭和 55）年には 470 人、さらに今回われわれが調査に入った 1999（平成 11）年には 196 人にまで落ち込んでいる（以上、住民基本台帳による）。小売業の存立には商品を購入してくれる消費者の存在は前提条件である。地域人口の減少は小売に限らず地域にサービスを提供するさまざまな機能の存立基盤をゆり動かし、それがまた人口減少の誘因となる。まさに悪循環といえる。

われわれは、以上のようなことをも常に念頭に置いた上で、これらの地域あるいはそこで暮らす人々の生活について考えていかなければならない。

II 牟岐町における消費者の買い物動向

出羽島に関して述べる前に、まずここでは徳島県商工労働部経営指導課による『徳島県買物動向調査報告書』（1983 年、昭和 58 年）を用いて牟岐町全体での当時の買物動向を大まかに把握しておく。同報告書は 1982（昭和 57）年の 7～8 月にかけて行われた調査（1982 年の牟岐町全 2287 世帯中 100 世帯に配布、回収数は 50）をもとに書かれたもので、本稿で今回資料として使用する 1980（昭和 55）年の京都大学による調査とは約 2 年のタイムラグがあるが、参考にする上では許容範囲内と考える。

同報告書では最寄品から買回品まで 13 品目について、その購買先を市町村ごとに集計している（表 1）。これによれば、「生鮮食料品」や「一般食料品」をはじめ「医薬・化粧品」、「荒物・金物・陶磁器」、「書籍・文具」といったもので地元購買率が 80%～90%代と高い値を示している。

表 1 牟岐町における商品別購買地

	牟岐町	日和佐町	阿南市	徳島市	県内その他	県外
生鮮食料品	90.4	2.3	0.0	0.0	0.9	0.0
一般食料品	93.3	4.3	0.0	0.9	1.5	0.0
呉服	49.2	5.3	0.9	38.6	2.3	3.5
肌着・下着	76.0	4.2	0.2	17.8	1.8	0.0
紳士服・婦人服	60.0	3.8	3.2	32.6	0.4	0.0
医薬品・化粧品	85.3	6.9	0.6	4.3	2.9	0.0
靴・カバン類	63.6	1.8	1.8	31.0	1.6	0.0
家具・建具	58.9	1.2	4.4	29.5	6.0	0.0
家庭電気製品	75.8	1.9	4.7	17.0	0.0	0.6
荒物・金物・陶磁器	84.4	3.8	1.0	10.4	0.4	0.0
書籍・文具	89.1	1.9	0.4	6.2	2.3	0.0
時計・貴金属・カメラ	55.0	2.1	3.6	36.0	3.2	0.0
レジャースポーツ用品	74.2	3.7	2.2	19.3	0.7	0.0

注：単位＝%，太字＝流出購買割合 30% 以上

『徳島県買物動向調査』（1983），p103より作成

一方もつとも地元購買率が低かったのは、「呉服」の49.2%であり、次いで「時計・貴金属・カメラ」の55.0%、「家具・建具」の58.9%となっている。これらの品目は、徳島市で購入されている場合が多く、それぞれ38.6%、36.0%、29.5%となっている。その他「紳士服・婦人服」、「靴・カバン類」といった品目でも徳島市での購買率が30%を超えている。つまり、買回品ともいわれるこれらの商品は、より高次の商業集積地において購入される場合が多い。その際、徳島市までの間に位置する阿南市や日和佐町といった場所で買い物が行われるケースは意外にまれで、流出購買先の殆どが徳島市であるといえる。

このように低次財は本町や駅前周辺の商店街をはじめとする町内において購入されており、高次財になるにつれ県内の首位都市である徳島市への依存率が高くなる。また、家庭電気製品は、購入サイクルが長く一回当りの購入額も比較的高額ではあるが、従来の消費者行動研究でも指摘されているように、配送やメンテナンス、設置工事などの問題もあり、地元での購買率が高い。

以上みてきたように、牟岐町における消費者の買い物動向を財の購買率のみから判断すると、地元の商店でも満足できる商品に関しては地元で購入し、より良いもの或いは自分の価値観にしっかりとくる商品をもとめる場合には、より高次の商業集積地である徳島市まで出かけている。交通費や時間は負担しなければならないが、それに見合うだけの満足を消費者が得られるためである。したがって当然のことではあるが、単価が高く購入サイクルの長い商品を入手する際には、労を惜しまず徳島市まで買い物に出かける消費者が多く見うけられる。

ちなみに同報告書ではある市町村から特定の市町村への流出購買割合が30%以上の場合を第一次商圏、同じく10~30%未満の場合を第二次商圏とし、徳島県内の商勢力を品目ごとに地図化して整理している。ここでは紙面の都合上地図を掲載することは出来ないが、牟岐町と徳島市との関係のみを説明しておく、「呉服」、「紳士服・婦人服」、「靴・カバン類」、「時計・貴金属・カメラ」といった商品において、牟岐町は徳島市の第一次商圏であるということになり、「肌着・下着」、「家庭電気製品」、「荒物・金物・陶磁器」、「レジャー・スポーツ用品」に関しては第二次商圏であるということになる。

III 出羽島住民の買い物・娯楽行動

次に、冒頭でも述べたように1980(昭和55)年度に京都大学文学部社会学教室が行った調査をもとに当時の島民の生活行動空間を娯楽や買い物行動から見ていきたい。ただし資料の制約上、ここではそれらについて大まかに述べるにとどまる。具体的には買い物や娯楽を行う実際の場所や頻度、またはその便利さについてみていくこ

とにする。また、医薬品の購入や通院など医療に関する行動についても若干考察を行う。

1) 調査の概要

再三にわたって述べているように資料は「1980（昭和 55）年京都大学文学部社会学教室による牟岐・出羽島調査」の際に得られたものを使用する。今回は、うち、買物や娯楽などに関する設問の部分をピックアップし集計した。同調査では、出羽島で生活をしている世帯のうち 135 世帯を対象に面接調査を行っているが、買い物等に関する回答がはっきりと記入されていたものはそのうち 119 世帯分であった。119 世帯の属性については表 2 に示したとおりである。

表 2 被調査世帯の属性（1980年アンケート調査より作成）

a) 世帯主の年齢

	実数	率
30歳代	14	11.8%
40歳代	19	16.0%
50歳代	35	29.4%
60歳代	29	24.4%
70歳代	18	15.1%
80歳代	4	3.4%
合計	119	100.0%

d) 世帯構成人数

	実数	率
1人	17	14.3%
2人	32	26.9%
3人	17	14.3%
4人	26	21.8%
5人	17	14.3%
6人以上	10	8.4%
合計	119	100.0%

b) 同居世代数

	実数	率
一世代	45	37.8%
二世代	46	38.7%
三世代	28	23.5%
合計	119	100.0%

e) 高校生人数

	実数	率
0人	66	55.5%
1人	20	16.8%
2人	25	21.0%
3人以上	8	6.7%
合計	119	100.0%

c) 65歳以上人数

	実数	率
0人	60	50.4%
1人	41	34.5%
2人	18	15.1%
合計	119	100.0%

a) 世帯主の年齢

50歳代が最も多く30歳代や40歳代といった比較的若い世代もまだまだみられるものの、平均年齢は約57.6歳で60歳代以上が3分の1以上を占めており、高齢化の兆しが既にみられる。世帯主の最年少は30歳、最年長が85歳であった。

b) 同居世代数

同居世代数をみると三世代同居が最も少ないという結果になった。一世代の中には高齢夫妻のみ、あるいは高齢者の一人暮らしといったかたちが多くみられる。また、世帯主が40歳代や50歳代でも子どもが学校や仕事の関係で島外へ出ており、夫婦だけが島で暮らしているといった世帯もみられる。二世代同居については、世帯主からみて孫にあたる世代が島外で暮らしている場合といわゆる核家族で構成されている場合とがある。

c) 世帯構成人数

全体的にみると、1人暮らしから6人以上という大家族までばらつきがある。同居世代数のところでも述べたように、1人あるいは2人暮らしといったものの中には、高齢単身世帯や高齢夫妻のみの世帯が多く含まれている。

d) 65歳以上人数

家族の内で65歳以上にあたる者の人数が1人という世帯が34.5%、2人という世帯が15.1%であった。つまり、家族の中に65歳以上の者がいるという世帯は全体の約半数にものぼる。

e) 高校生以下の人数

ここでは便宜上高校生以下という言葉を用いて、18歳未満あるいは「こども」とほぼ同じ意味で用いている。同居する家族の中に高校生以下の者がいるという世帯は44.5%と半数を割ってはいるが、いわゆる「こども」のいる世帯は53世帯もある。ちなみに筆者らが調査に入った1999（平成11）年ではわずか3世帯となっている。

なお、以下では集計の結果を全て図や表にすることは避け、必要と思われる情報については記述で補うこととする。

2) 買い物

(a) 菓子類

表3および図1に示したように、菓子類を購入する場所については堤商店あるいは川長商店といった店舗があることから、「出羽島内」が圧倒的に多く88.1%にのぼる。これに次ぐのが「牟岐」の10.1%であるがその差は大きい。購入場所としてあげられていたのはこの二ヶ所のみであるが、単価が安い上に島内の店舗でもある程度の商品が揃っているということから考えれば当然の結果である。また、購入する頻度に関しては「毎日」と答えた世帯が58.7%を占め、「週に2～3回」までを含めると全体の四分の三以上になる。この事からもわかるように、菓子類は毎日あるいはそれに近いペースで各世帯に購入されており、したがってその購入場所はもっとも身近な島内の商店が多くなるということになる。「牟岐」で購入される場合にも他の買い物のついでに購入してくるという場合が多いようである。

さらに、菓子類を購入するということに関してその便についても尋ねているが、「便利である」(48.0%)という答えと「不便である」(52.0%)という答えとがほぼ半数ずつとなっており、島民の満足度は決して高いとは言えない。

表3 出羽島住民の買い物・娯楽・通院先

	出羽島内	牟岐	阿南市	徳島市	その他	行かない	合計
菓子類	96	11	0	0	0	2	109
	88.1	10.1	0.0	0.0	0.0	1.8	100.0
食料品	82	32	0	0	0	1	115
	71.3	27.8	0	0	0	0.9	100.0
衣類・雑貨	0	106	1	3	1	3	114
	0.0	93.0	0.9	2.6	0.9	2.6	100.0
電化製品	0	92	6	2	10	3	113
	0.0	81.4	5.3	1.8	8.8	2.7	100.0
外食	0	13	0	7	2	69	91
	0.0	14.3	0	7.7	2.2	75.8	100.0
日帰り行 業旅行	0	3	1	23	9	59	95
	0.0	3.2	1.1	24.2	9.5	62.1	100.0
映画・音 楽鑑賞	0	2	0	7	0	85	94
	0.0	2.1	0.0	7.4	0.0	90.4	100.0
医薬品	18	63	0	0	1	13	95
	18.9	66.3	0.0	0.0	1.1	13.7	100.0
軽病時の 通院先	44	56	0	3	4	1	108
	40.7	51.9	0.0	2.8	3.7	0.9	100.0
重病時の 通院先	0	71	0	11	13	8	103
	0.0	68.9	0.0	10.7	12.6	7.8	100.0

注) 上段=人数(人)、下段=合計に対する比率(%)

資料:アンケート調査(1980年京都大学社会学教室による牟岐・出羽島調査)

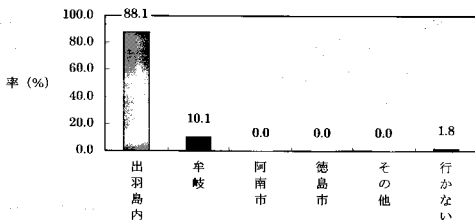


図1 菓子類の主な購入先

(b)食料品

次に食料品についてみる。食料品の主な購入場所については表3および図2に示した通りであるが、これも菓子類と同様に「出羽島内」での購入が最も多くそれに次いで「牟岐」といった具合になっている。ただし菓子類と比較すると「出羽島内」の全体に占める割合が少し下がり、「牟岐」を主な購入先とする世帯も27.3%と三割近くに達している。それに比べると購入頻度に関しては菓子類の場合と非常に類似した傾向が見られ、「毎日」が60.3%、「週2～3回」が16.4%となっており、毎日あるいは二日に一回のペースで購入されているケースが全体の4分の3を超える。

なお、便/不便についての回答では「便利」と答えたのが44.4%、「不便」と答えたのが55.6%となっている。菓子類の場合よりはほんの少しだけ不満度があがっているとも解釈できるが、ほぼ同程度とみてよいであろう。

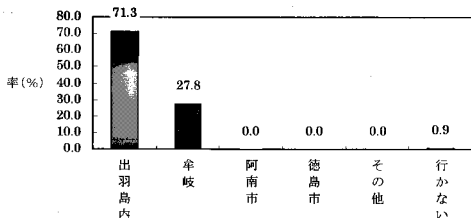


図2 食料品の主な購入先

(c)衣類・雑貨

衣類・雑貨について、とくに衣類については「出羽島内」で販売を行っている店舗が存在しないため、その購入先は当然ながら島外に求められることになる。実際の購入先については表3および図3に示した通りであるが、これをみても明らかなようにそのほとんどが「牟岐」に集中しており、割合にすると実に93.0%もの世帯がこれに該当する。「牟岐」にはこれらの商品を扱う商店が商店街等にいくつか立地しており、出羽島の住民は日常使用する衣類・雑貨に関してはそれらの店舗でそろえているということになる。「徳島市」や「阿南市」といったより高次な商業集積地で衣類・雑貨を購入するという世帯は二都市を合計してもたった4世帯(3.5%)しか無く、皆無に近い。

購入の頻度については「月に1回程度」が39.7%と最も多く、これに次ぐのがその

前後の「年3～5回程度」(20.7%)、「月に2～3回程度」(17.2%)となっている。衣類・雑貨に関しては世帯間で多少の差はみうけられるものの、概ね月に1回前後を中心に購入されていることが多いといえる。ただし、「年に3～5回程度」という場合と「月に2～3回程度」という場合とでは、年間の購入回数に換算し直すとかかなりの差になってくるため、この事を考慮に入れば世帯間で差があるとみることもできる。ここでは検討することが出来なかったが、構成人数の多い世帯や育ち盛りの子どものいる世帯などでは、多少購入頻度が増すという傾向があるのかも知れない。

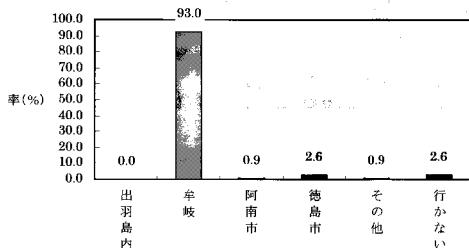


図3 衣料・雑貨の主な購入先

(d) 電化製品

電化製品に関しても出羽島内には電器店が存在しないため、島外で商品を購入せざるをえない。その購入先は表3および図4からもわかるように「牟岐」が主で全体の81.4%を占める。衣類・雑貨の場合と若干異なるのは「阿南市」や「その他」といった場所での購入が多少みられるということである。とくに「その他」の地域については、10世帯(8.8%)が電化製品の購入先として答えているが、そのほとんどが牟岐町に隣接する日和佐町であった。出羽島住民の中には日和佐出身、あるいは日和佐に親戚が住んでいるという人も多く、そのような理由から電化製品を日和佐の店舗から購入するというふうに答えている世帯もある。

ただし大体の家庭では「牟岐」にある店舗から購入することがやはり多いようであり、具体的には「トミタ商店」や「クリバヤシ商店」などが購入先としてあげられている場合が多い。商品の購入に際してそれに付随してくる設置工事やメンテナンスといったさまざまな要素が、顔なじみの店から買いたいという住民の購買行動に影響をあたえているものと思われる。

購入の頻度をみてみると「月に1回程度」とそれから「年に1回程度」にヤマがわかれている。一概に電化製品といっても、月に一度買い替えなければならないものか

ら年に一度、もしくは数年に一度購入すればそれでことたりるものまで、さまざまな商品が想起されるためにこのような結果となったことが予想できる。どちらにせよ、それほど購入サイクルの短い商品ではないだけに、ある程度購入する店も決めているといったところではないだろうか。

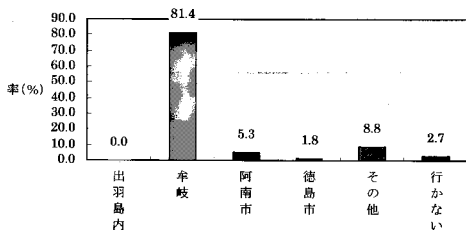


図4 電化製品の主な購入先

3) 娯楽

(a) 家族と外食

家族との外食について尋ねてはいるのだが、これをそのまま集計するとほとんどの人が行かないということになってしまう(表3, 図5)。ただし行かないということが全く行かない事を指すのか、あるいはほとんど行かないといったレベルのものを指すのかといったことについては、推測の域を脱し得ないのでそのことには言及しないでおく。

外食という習慣があまりなかったためか、家族と外食に出かけると答えたのは24.2%でしかない。場所としてあがっているのは「牟岐」(14.3%)や「徳島市」(7.7%)といったところである。その頻度をみても最も多いのが「年に3~5回程度」で53.8%と過半数となっている。以上のようなことから当時の出羽島住民は、ある特別な日など年に数回程度「牟岐」や「徳島市」で家族と外食を行うことがあるが、これも全体の4分の1程度の世帯でしかなく、今回の調査結果のみから判断すると、外食というものが日常的に行われているわけではなかったというふうを受け取れる。

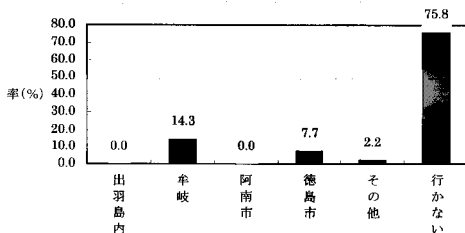


図5 外食に出かける主な場所

(b)日帰り行楽旅行

これについても外食同様、日常的にはあまり行われていないようで **62.1%**が行かないと答えている(表3, 図6)。出かける場合についてみると、行き先としては「徳島市」の割合が **24.2%**と最も高い。その頻度については「年1回程度」(**46.4%**)と「年に3~5回程度」(**35.7%**)とで8割を超える。つまり全体の4分の1ほどが、年に1回あるいは季節ごとに1回くらいのペースで「徳島市」へ日帰りで行楽旅行に出かけている。単純に数字だけから解釈するとそのように読みとれる。

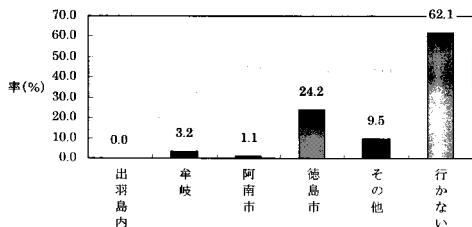


図6 日帰り行楽旅行に出かける主な場所

(c)映画・音楽鑑賞

他の娯楽に例外なく映画・音楽観賞へも行かない人が多く **90.4%**にものぼり、牟岐や徳島へ出かけて行って映画や音楽を楽しむ人が僅かにみられるくらいである(表3,

図7)。このように映画・音楽鑑賞は、外食や行楽旅行と比べても極めて都市的な娯楽であるため、大多数の出羽島住民にとってはあまり縁のないものであったということがわかる。

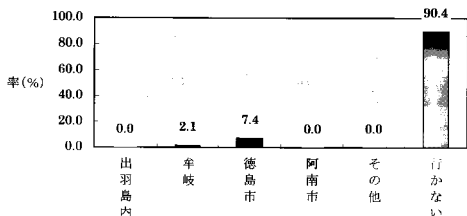


図7 映画・音楽鑑賞に出かける主な場所

4)医療関係

(a)医薬品

出羽島の住民が医薬品をどこで購入しているのかということについてまとめたのが表3および図8である。最も多いのが「牟岐」で66.3%となっており、これに次ぐのが「出羽島内」の18.9%である。牟岐には薬局も幾つかあり、島の住民の多くが医薬品をそこで求めている。一方、島内の川長商店でも医薬品が扱われていたようでそこから医薬品を購入するとしている世帯も案外多い。なお、購入する頻度に関しては「月に1回程度」が最も多い(45.8%)という結果になっている。

その他、医薬品において特徴的に見られた調達方法として行商をあげることが出来る。全体からみれば利用率は決して高いとはいえないものの、約1割の世帯が行商から薬を購入すると答えている。これらの薬売りは富山や奈良あるいは阿南からやってきていたようである。ただし行商からのみ医薬品を購入している世帯はごく僅かで、多くは川長商店や牟岐にある商店からも薬を購入している。

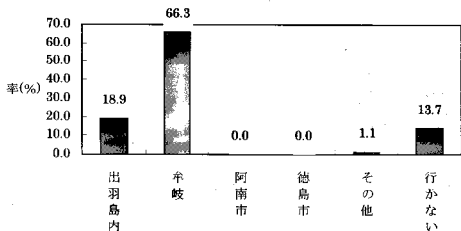


図8 医薬品の主な購入場所

(b) 病気の場合の通院先

次章においても少しふれることにするが、出羽島では離島であることもあって病気やケガをした時の住民の不安は大きい。ここではそのうち病気について、その通院先をみてみることにする。

まずは軽い病気の場合についてみる。「出羽島内」には診療所があり軽い病気の際にはここを利用する人が約4割にのぼっている(表3, 図9)。しかし最も多いのは「牟岐」で51.9%となっており、島内よりも高い値を示している。「牟岐」には県立病院がありそこを利用しているという人が多い。「徳島市」や「その他」も全くないわけではないが、わずかである。

次に重い病気の場合についてその通院先を尋ねているが、「出羽島内」が皆無となっており、軽い病気のとときはこの点で明らかに異なる(表3, 図10)。これは島内の診療所では重病に関しては対処しきれないという住民の判断があらわれた結果とみることも出来るし、恐らく実際にそうであろう。そして当然ではあるがその分「牟岐」の割合が高くなっている。しかしここで注目すべきことは「徳島市」や「その他」の病院へ通院する(ただしここでは、入院等医師に診てもらおう行為全てを含むものとしてこの用語を使用している)という答えが、それぞれ10.7%, 12.6%と軽い病気の場合と比べると明らかに高くなっているということである。

重い病気になると手術などの治療行為を行ったり患者を入院させるには、ある程度高度な医療設備が整っている必要があるため、総合病院クラスの病院のあるこれらの場所があがってくるのであろう。なお、「その他」の地域を具体的に示しておく、日赤病院のある小松島市などがこれにあたる。

また、軽い病気の場合で8割、重い病気の場合では回答してくれた全員が「不便である」としており、医療サービスに関する住民の満足度は非常に低いものであると

言うことが出来る。

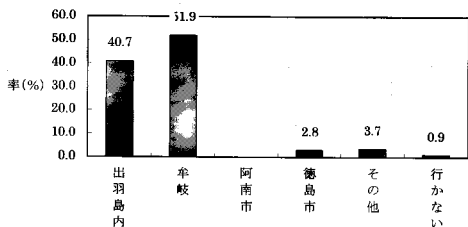


図9 軽病時の通院先

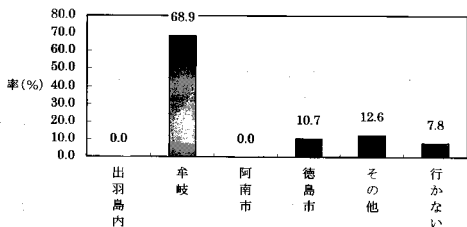


図10 重病時の通院先

IV 出羽島住民の生活に関わる諸問題

アンケート調査の中では「生活するうえで不便に感じることを自由回答形式で答えてもらっている。一つ一つの回答はまさに自由に記述されたものではあるが、概ね幾つかのカテゴリーに振り分けることが可能である。筆者の判断でカテゴリー分けを行った。その結果が表4および図11である。

「すべて」が不便あるとするかなり悲観的な回答は1.7%とごくわずかにとどまっているものの、多くの住民が抱えている不満や不安というものをこの集計結果からうかがい知ることができる。数的に一番多くあがってきたものは「連絡船の本数や最終

便の時間」に対するもので、全体の 41.2%と実に多くの人が同じ思いを抱いていたということがわかる。また「悪天候時に連絡船が欠航になる」(16.0%)という回答もみられ、連絡船に関わる問題がまずは、あげられている。

つぎに「買い物」をする際に不便を感じるとの回答が 23.5%みられるが、これは島内で営業を行っている商店がたった 2 店舗しかないということもあって、品揃えや商品の値段等で満足していない人たちがいるということを表わしている。消費者としてそれらを重んじようとすれば結局船で「牟岐」まで渡らなければならない、時間と労力、交通費、がかかってしまう。したがって、彼らはどちらを選択するにせよ目をつぶらなければならない事柄に出くわすこととなり、それが彼らに「不便」と感じさせてしまう一因となっている。

「病院や医療」に対しても不便と感じている人が多くいる (21.0%)。離島ということで急病人が出た時に迅速な対応ができないことや、普段の通院にもひと苦労するといったことを考えれば、確かに不便であろうことは想像に難くない。

さらにもう一つ大きな問題として意識されているのは「学校」の問題である (12.6%)。同調査の行われた 1980 (昭和 55 年) 当時まだ島内には出羽小学校が開校中であったが (1993 : 平成 5 年に休校)、中学・高校に関しては島外までの通学を余儀なくされていた。船に乗っての通学は、時間的にもロスが多いということのみならず、夕方の最終便で島へ帰ってくるためにはクラブ活動等にも十分に参加できないといったことなど、子どもにとってのデメリットを指摘する親も多い。

以上でみてきたことの他にも「汲取りやゴミ焼却の問題」、人によっては「離島であること自体が心理的に不安を感じる」といった意見もみられた。少数意見では「世間が狭い」、「道路が狭い」、「島外にいる身内の救急時にすぐに行けない」、「港湾設備が良くない」などの意見があった。

これら島民が不便であると感じているさまざまな問題をひとつひとつ丹念にみていくと、それぞれの問題が相互に関連しあっているということがわかる。改めて言うまでもないであろうが一応指摘しておきたい。

その一方で「住めば都」「別に不便なことは何もない」との回答ももたった 2 例のみではあったが確認できた。このことも最後につけ加えておきたい。

表4 生活していて不便に感じること

カテゴリー	合計に対する比率 (%)	人数 (人)
連絡船の本数・最終便時刻	41.2	49
買い物	23.5	28
病院・医療	21.0	25
悪天候時・連絡船の欠航	16.0	19
学校・通学	12.6	15
汲取り・ゴミの焼却	5.9	7
すべて	1.7	2

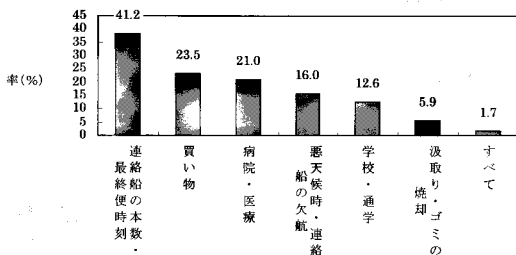


図11 生活するうえで不便に感じること

VI おわりに

本章では 1980 (昭和 55) 年当時の出羽島住民の生活に関わるさまざまな行動についてみてきた。ただし生活行動と銘打った割には、一人一人の生活行動それ自体を十分に復元することは資料の性質上不可能であった。それでも離島というある種特殊な地域に関しての知見は得ることが出来たと筆者自身は考えている。

たとえば出羽島住民は買い物へ出かけたり娯楽を目的に外出したりということをあまり積極的には行おうとしない。特に「家族と外食」、「口帰り行楽旅行」「映画・音楽観賞」といった娯楽に関しては「行かない・しない」と答えた世帯が非常に多く離島であるがゆえの身動きのとりにくさが反映された結果といえる。また、生活するうえで不便と感じていることに関しても、やはり島でくらす人々ならではの思いがあげられている。

このように直線距離にしてわずか数キロとはいえ、海という物理的な障害の介在する向こう岸の「牟岐」に比べて、同じ牟岐町でも出羽島住民の生活行動はかなり異なるということは容易に想像できるであろう。にもかかわらず、公共機関等の行う大掛かりな調査ではこれらがすべて「牟岐町」という単位で括られてしまう。三谷(1997)が指摘するように地理学でもよりマイクロなレベルでの事例研究の積み重ねが必要であろうし、多くの地理学教室で実習として行われている調査と、そのアウトプットとしてまとめられる報告書の数々が、地域に本当の意味で貢献できればと考えている。

最後に全くのわたくしごとになってしまうが、筆者は日頃、都市をフィールドに研究を行っている。そのため、ともすればそこすなわち都市的地域でみられる現象がさも日本全国どこでも同じように見られるもの、と勘違いしてしまっている嫌いがある。今回の出羽島調査での経験が地域を眺める新たな視点を筆者にももたらしてくれれば、と密かに期待をしている次第である。

【付記】本稿を作成するにあたっては、1980(昭和55年)に京都大学文学部社会学教室が行った調査で得られた資料を使用させて頂いた。当時の調査員の方々とアンケートに答えてくださった住民の皆様に感謝致します。また、筆者が調査に入った時に現地でお世話になった、牟岐町商工会の井元進一主任と出羽島の川長商店、堤商店の皆様に感謝の意を表します。

参考文献

- 浅川雅美・大沢清二(1997):離島における生活情報受容と食品の購買行動.日本家政学会誌, Vol.48, pp.343~351.
- 徳島県商工労働部経営指導課(1983):『徳島県買い物動向調査報告書』pp.48~58. p.103.
- 三谷今日子(1997):過疎山村における高齢者の生活行動—島根県瑞穂町の2集落を事例として. 地理科学, vol.52, pp.43~58.
- 宮沢仁(1996):離島における消費者購買行動の一考察—長崎県五島列島岐宿町の事例—. 経済地理学年報, vol.42, pp.44~57.